心ある機械たち again

2019年12月28日［土］～2020年2月2日［日］

［会場］**BankART Station＋BankART SILK**

［時間］11:00～19:00　［休館日］2019年12月30日［月］～2020年1月3日［金］

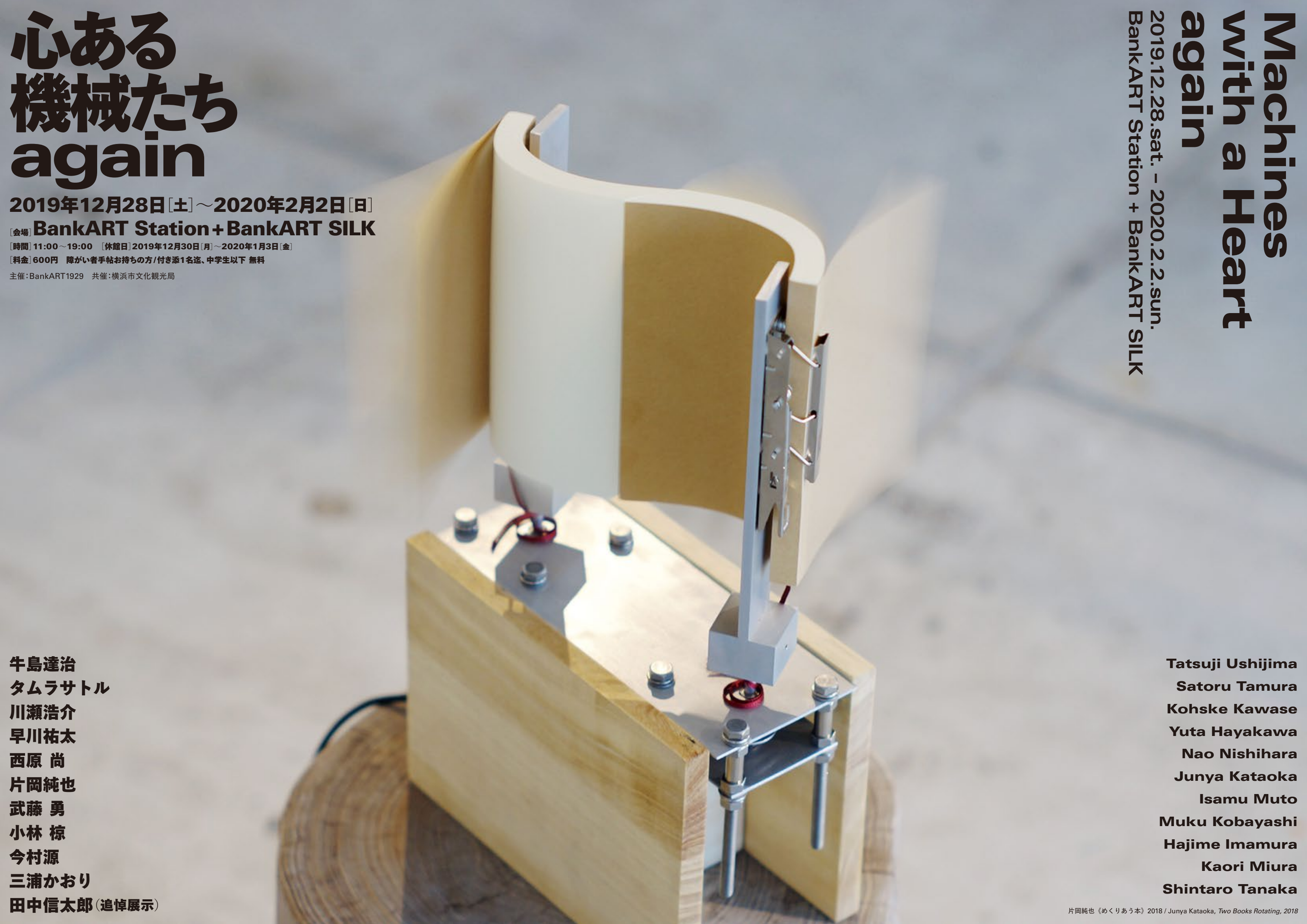
［料金］600円　障がい者手帖お持ちの方/付き添1名迄、中学生以下 無料

主催：BankART1929　共催：横浜市文化観光局

Machines with a Heart again

2019.12.28.sat. – 2020.2.2.sun.

BankART Station + BankART SILK



牛島達治
タムラサトル
川瀬浩介
早川祐太
西原 尚
片岡純也
武藤 勇
小林 椋
今村源
三浦かおり
田中信太郎（追悼展示）

Tatsuji Ushijima
Satoru Tamura
Kohske Kawase
Yuta Hayakawa
Nao Nishihara
Junya Kataoka
Isamu Muto
Muku Kobayashi
Hajime Imamura
Kaori Miura
Shintaro Tanaka

片岡純也《めくりあう本》2018 / Junya Kataoka, *Two Books Rotating, 2018*

心ある機械たち again

2019年12月28日［土］～2020年2月2日［日］
［会場］BankART Station + BankART SILK
［時間］11:00～19:00
［休館日］2019年12月30日［月］～2020年1月3日［金］
［料金］600円　障がい者手帖お持ちの方/付き添1名迄、中学生以下 無料
［オープニングレセプション］
2019年12月27日［金］18:30–20:00 @ BankART Station

2008年にBankART1929で開催した「心ある機械たち」。あれから10余年を経て、下記のような「心ある機械たちagain」を企画してみました。
基本的に役にたたないけれど、常に黙々と働いていて、どこかやさしく、そこにいても邪魔にならない、でも何か気になる、そんな運動体の展覧会。再登場の作家もいますが、基本的に初登場の作品群です。新規の作家にもご参加いただきました。
当時から比べると、コンピュータやiPhoneが、ごく身近な存在になってきましたが、決してテクノロジーだけで全てをカバーできる時代になったわけではありません。
むしろ、こういった時代だからこそ、コミュニケーションにおいて、穏やかさや配慮、丁寧さが、必要とされるのでしょう。「機械」と接する時間が圧倒的に増えた時代に、今回登場する「でくのぼうたち」はどういった表情を見せてくれるのでしょうか？
尚、前回出品いただき、今年8月に亡くなられたネオダダ出身の田中信太郎氏の作品「ハートのモビール」の小品を追悼展示させていただく予定です。

追悼展示｜田中信太郎

1940年東京生まれ。1959年より読売アンデパンダン展に出品。60年「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」に参加。1969年パリ・ビエンナーレ、1971年サンパウロ・ビエンナーレ、1972年ベニス・ビエンナーレ、2001年インド・トリエンナーレ等、国際的で活躍。2003年大阪国立国際美術館で回顧展。ポピュラーな作品としては、越後妻有アートトリエンナーレの「赤とんぼ」やアーティゾン美術館（2020.1.18～/旧ブリジストン美術館）の壁面の作品がある。BankART1929関連では、2008年に「心ある機械たち展」で自動演奏のピアノのオブジェを出品。2014年には「かたちの発語」展（田中信太郎＋岡崎乾二郎＋中原浩大、3氏による個展）に参加。またBankARTスクールでは何度もゼミを担当していただき、若い人たちを牽引してくれた。2019年8月、胃がんのために死去。

■お問い合わせ｜BankART 1929 office
TEL: 045-663-2812　E-mail: info@bankart1929.com　HP: bankart1929.com

■アクセス
□**BankART Station**（横浜市西区みなとみらい5-1）みなとみらい線「新高島駅」地下１階
□**BankART SILK**（横浜市中区山下町1シルクセンター内1F）みなとみらい線「日本大通り駅」徒歩4分
□**BankART Home**（横浜市中区相生町3-61 泰生ビル1F）みなとみらい線「馬車道駅」徒歩5分
営業時間11時～23時/日曜休

牛島達治

80年代半ば、拾った石のためのプレーヤーの制作を思い立って以来、「無用な機械」と呼ぶ作品の制作を始めた。やがて私の感性は、様々な出会いの中で、手のひらの中の出来事から建築的なスケールでの思考へと拡張されてきた。メカニカルな仕組みや時間軸にともなう変化=動き、自然科学や終わりのないいとなみに惹かれる。しかし、私の表現（≒問い）は、それらを造形的に、あるいは、工学的な合理性で解決しようとは思わない。いずれも大切な方法ではあるが、どちら側にもよりたくはない。造形と工学を地平として立ち上がるのだが、頭部をどこにむけるかということ。例えば、僅かにずれた2枚の図像から視線のコントロールで立体視する時のように、第三の状態の所在を組み立てて行きたい。「建築」から街へ出て行こうかというのが近ごろの気分なのだ。

西原 尚

音を主軸に、美術制作とパフォーマンスを行っている。音を鳴らすために必要な体や物へと関心事項や制作動機は展開し、同時に活動領域は美術や音楽を横断しつつ拡張している。国内外の展覧会やパフォーマンスイベントに参加。
2019年の主な展示やパフォーマンスに、「FOLLY SYSTEMS」（Roulette Intermedium NY）、「富士の山 Art Hub」（富士市）、「SUPER-TRAJECTORY Media / Life Out of Balance」（臺南市美術館）、「日本ポーランド現代美術展」（パヴェウ・ロマンチュクとデュオ，京都芸術センター）、「六本木アートナイト2019」（森美術館）、「Synthetic Mediart」（台北花博流行館）、「春のドンガラリンリン」（小牧市市民会館）、「雨ニモマケズ」（BankART Station）、「声を呼び覚ます」王虹凱（横浜TPAM）。

片岡純也

1982年、栃木県生まれ。2005年、武蔵野美術大学情報デザイン学科卒業。2010年、筑波大学大学院芸術専攻総合造形領域修了。主な個展に『二つの心臓の大きな川』（2019、アーツ千代田 3331、東京）、『Under35 片岡純也＋岩竹理恵』（2017、BankART studio NYK、神奈川）、『潜藏的星座』（2016、寶藏巖、台湾・台北）など。グループ展・芸術祭に『めがねと旅する美術展 東京飛地展示』（2018、カマタソーコ、東京）、『六本木アートナイト』（2018、六本木ヒルズ、東京）、『The 22th Ifva Festival』（2017、Hong Kong Art Center、香港）など。

武藤 勇

1997年名古屋芸術大学卒業、1998年CCA北九州アーティストリサーチコース修了後、アート活動とともに1998年N-mark代表として多くのアートプロジェクトを展開。2005年「ミーティングキャラバン」をBankART出版から出版。主な作品・展示は2009年「重慶インターナショナルワークショップ」（重慶、中国）で《ワールドすき焼きツーア》《リレーする肖像》を発表。2012年同プログラム、「2014年文化庁メディア芸術祭愛知展」（愛・地球博記念公園 愛知）で《全自動土下座珈琲》、2018-2019年「ボーダレス2018/ランドリー展」（アートラボあいち、愛知）で《不測の事態》などの作品を発表。

小林 椋

1992年東京都生まれ。2017年多摩美術大学大学院美術研究科 修士課程 情報デザイン領域 修了。2019年京都市立芸術大学大学院美術研究科 修士課程 彫刻専攻 修了。モノがある機構や機関に挿入されたり、その運転へ加担することによって生じる性質の発現や疲弊の様子を観察しながら作品を制作する。時里充とのユニット「正直」などでライブ活動を行う。近年の展覧会に「ソテツとてつもなく並」（2019、ギャラリー16）、「フィジーク トス」（2019、アキバタマビ21）、「プールの輪にワニ」（2019、ギャラリーN）など。

撮影：木暮伸也

タムラサトル

1972年栃木県生まれ。1995年筑波大学芸術専門学群 総合造形卒業。主な展示に、「ニュー・メディア　ニュー・フェイス02」（2002、NTT Inter Communication Center［ICC］、東京）、「First Steps : Emerging Artists from Japan」（2003、P.S.1 Contemporary Art Center、ニューヨーク）、「小山マシーン」（2010、小山市立車屋美術館）、「タムラサトル《真夏の遊園地》」（2014、栃木県立美術館）、「釜山ビエンナーレ2016」（2016）、第14回アーティスト・イン・スクール タムラサトル（現代美術家）×川口市立前川東小学校6年生89人成果発表展〈われわれはワニを回す〉／講師作品展〈川☆口マシーン〉（2019、川口市立アートギャラリー・アトリア）など。回るワニ、後退するクマ、登山する山、端数がない重量の彫刻、開放的な100Vのスイッチ、動き続ける図形もしくは文字、10回たたく装置、空間を最大限に使用しただけインスタレーション などを制作・発表している。

川瀬浩介

作曲家・美術家。1970年京都生まれ、東京育ち。02年、光のための音楽《Long Autumn Sweet Thing》を発表し、美術家としてデビュー。10年、第13回文化庁メディア芸術祭に、代表作《ベアリング・グロッケン II》（ベアリングに用いられる金属の球を使って鉄琴を自動演奏させる楽器）が出展され話題に。12年冬、東京スカイツリーで催されたイルミネーションイベントにて音と光のインスタレーション《光の音色：a tone of light》を発表。作曲家として、10年より現在まで、森山開次、ぴぴのこづえと協働によるダンス・パフォーマンス《LIVE BONE》を展開中。15年と19年には、新国立劇場委嘱ダンス作品として制作された森山開次《サーカス》、《NINJA》の音楽を担当した。デビュー以来、「間口が広く奥行きのあるもの」を追求している。「あなたの心に眠る感動を呼び覚ますこと――それが私の使命です」。www.kawasekohske.info

早川祐太

1984年岐阜県出身。2010年武蔵野美術大学大学院造形研究科彫刻コース修了。重力や空気、水の表面張力といった「現象」を取り入れ、彫刻やそれらを構成したインスタレーションの作品を制作。ものの所存に触れる試みとしての作品を制作している。主な展覧会に「クリテリオム95 早川祐太」（2018、水戸芸術館現代美術センター、茨城）、「i」（2013、HAGIWARA PROJECTS、東京）、「:No Subtitle」（2013、HAGIWARA PROJECTS、東京）、「複合回路Vol.2 早川祐太」（2010、gallery αM、東京）「from/to #5」（2009、Wako Works of Art、東京）、「Re:Membering –The Next of Japan」（2009、Alternative Space LOOP、ソウル、韓国）などがある。

今村 源

1957年大阪に生まれる。1980年代半ばよりにポール紙、発泡スチロール、石膏、針金など軽い素材を用いて制作を開始、日常品に少し手を加えた作品、キノコへの興味を展開したものなどに加え、場所と関わりを持つ大規模な制作も手がける。近年“私”について考える制作を継続中。展覧会に「Shizubi Project 3 "わた死としてのキノコ"」（2013、静岡市美術館、静岡）、「東アジア文化都市2017」（2017、京都）、「アジア回廊 現代美術展」（2017、京都芸術センター）、「パラパラパラ」（2018、ART ZONE、京都）、「起点としての80年代」（2018、金沢21世紀美術館/高松市立美術館/静岡市立美術館）。

三浦かおり

2005年京都造形芸術大学卒業（情報デザイン）。日常にあるものから余韻、気配、痕跡をモチーフに制作しています。主な個展に「フツフツのそれが消えるまで」（2017、Gallery Hasu no hana、東京）、白い堆積（2016、Gallery Camellia、東京）、「いしきのそとのダンペン」（2016、HAGISO、東京）、「unknown time」（2015、Gallery Camellia、東京）、「記憶の果て」（2013、Gallery Hasu no hana、東京）。主なグループ展に、Japan im Palazzo（2016、Kunsthalle Palazzo Liestal、スイス）、「いわきまちなかアートフェスティバル玄玄天」（2016、福島）「中之条ビエンナーレ」（2013、2015群馬）等。